

かぐらおが

(題字は初代学長 山田守英氏)

第108号

平成14年3月22日

編集 旭川医科大学
 広報誌編集委員会
 発行 旭川医科大学教務部学生課



くつろぎのとき (クッチャロ湖)

(写真撮影:教務部長 風間 國康)

卒業生を送るにあたって……………久保 良彦………… 2	一年を振り返って……………清永 久子………… 12
第24期生を送るに当たって……松野 丈夫………… 3	一年を振り返って……………横井 久美………… 12
第3期生に贈ることば……………北村久美子………… 4	新歓合宿のご案内………………………… 13
卒業を迎えるにあたって……………児玉 知之………… 5	平成14年度日本育英会奨学生の募集について… 13
卒業にあたって……………上田 泰久………… 5	学生団体の設立・継続届について…………… 13
卒業にあたって……………山岸恵理子………… 6	平成14年度 前期授業料免除及び延納・分納について… 13
医学科第24期卒業生名簿………………………… 6	学生教育研究災害傷害保険の加入について…… 13
卒業にあたって……………富樫弥奈子………… 7	平成13年度 1年のあゆみ………………………… 14
卒業にあたって……………佐藤 仁美………… 7	入院患者さんとクリスマスコンサート…………… 16
看護学科第3期卒業生名簿………………………… 8	平成13年度留学生冬季交流事業実施される…… 16
平成13年度 博士・修士学位記授与者名簿…… 8	「米国医学教育に関する特別講義」の開催…………… 17
退官にあたって……………藤澤 仁………… 9	研究室紹介………………………… 17
就任のご挨拶……………高井 章………… 10	訃報………………………… 18
一年を振り返って……………林 韻欣………… 11	教官の異動………………………… 18
一年を振り返って……………南 尚希………… 11	窓 外………………………… 18



卒業生を送るにあたって

— “たて” から “よこ” へ —

旭川医科大学長 久保良彦

旭川の春は雪解けを兆しにやって参りますが、それはまた恒例の学位記授与式が間近なことを知らせてくれます。

この春めでたく医学士・看護学士の学位を取得される医学科24期生97名ならびに看護学士67名のみなさんの感慨はいかばかりでしょう。前途の希望に胸を膨らませ、はち切れんばかりと推察いたします。学部生活を終えられるみなさんに心からお祝いを申し上げます。

送り出す側も、手塩にかけたわが子が世に出るのように、これから受ける世間の評価に大きな期待を寄せながら、内々別離の淡い感傷に浸る時でもあります。

医学科に置いて6年、看護学科では4年の長い間、卒業生のみなさんはそれぞれ学業にいそしみ、また、課外の活動で学生生活をエンジョイされたことと想います。これまで送られた学生生活の流れのひとすじ、ひと筋は緋い交ぜ合され、これからの長い人生で直接・間接にみなさんの心の支えとなり、力強い励ましになることと思います。

さて、新しい世紀に入っておりますが、わが国では、国内のさまざまな分野の構造改革が叫ばれていることは衆知のところですが。身近なところで起きている国立大学の改革や統合・再編の問題も、わが国における国立大学の相互不可侵の講座制“たて”型構造あるいは高く厚い壁に仕切られた事務部門の“たて”型システムが、「知の時代」といわれる21世紀の人材育成や研究の推進に相応しくないことに国が気付いたために生じているのです。

医学・医療についてみますと、21世紀は爆発的ともいえる医学の進歩と疾病構造の変化が特徴となるといわれています。例えば、ゲノム医学の発展は患者の体の個人差を明らかにして、それぞれに適した疾患の予防、診断あるいは治療をおこなうオーダーメイドの医療（個の医療）という夢の実現さえ現実味を帯びさせるものです。また、臓器移植、生殖医療、遺伝子診断；遺伝子治療、再生医療あるいはサイバネティクスなど、これからの発展が期待される高度先進医療の分野は少なくありません。

ここにおいて、このような高度先進医療が医療の現場に持ち込まれる場合、常にそれまでの規範では

律し切れない生命倫理の新しい問題がかかわってくることに留意しなければなりません。それは21世紀の医学研究、医療技術が、これまでの時代の枠を超えた新しい医の倫理に立脚しておこなわれるものでなければならないことを意味します。これからみなさんは、ひとり一人がそれに応える環境整備を担ってゆかなければならないこととなります。

当然、そこでは一般医療におけると同様に患者主体の医療が重視されなければならない、インフォームド・コンセントと個人情報保護および情報による差別の禁止が基本原則となります。いいかえますと、かつて医学・医療の世界で普遍的であったパターナリズム（父権主義）という医師と患者の関係—“たて”の関係ではなく、明確に患者の権利を認め、患者とともにその病と闘うという“よこ”の関係に変換されることがその基本になるということです。この“たて”から“よこ”への変換が必要なのは医師と患者の関係ばかりではありません。医療技術者、事務職、その他みなさんがこれから関係を持たれるすべての職種の人々の間に当て嵌まることは申すまでもありません。

このように従来、権威（authority）や管理（control）という“たて”の関係が基軸となって動かされてきた世の中のさまざまな仕組みが、これからはパートナーシップ（partnership）、共同（collaboration）あるいは協力（cooperation）といった“よこ”の繋がりが主体となって動いてゆく世の中になる、あるいはそういう世の中にならなければならないといえます。もちろん、そこでは組織に埋もれる個人ではなく、しっかり自立した個人として助け合うパートナーシップ、共同あるいは協力であり、それにより動かされる組織でなければなりません。従って、みなさんひとり、一人の力が“よこ”社会の基本単位としてますます大切になります。

生涯学習という長い道を歩むに耐える健康が最も大切なことはいまでもありません。健康管理に留意され、患者から“学ぶ”という医学の基本を忘れずに今後の研鑽を積まれることを願ってやみません。



第24期生を送るに当たって

医学科第6学年担当 松野 丈夫

医学科第24期生のみなさん、卒業おめでとうございます。2年の間、学年担当として皆さんの大学生活と私生活の一部を共有した仲間として、お祝いの言葉を述べさせていただきます。

6年間という長い学生生活を終えて、国家試験に合格した時点で皆さんはプロです。卒業・国家試験はアマとプロの分かれ目であると言えます。プロを見つめる世間の目は厳しいものがあると思いますし、皆さんもこれからは当然プロとしての厳しい目を養って行かなくてはいけないと思います。そしてこれから皆さんがいかなる道に進もうと、全員が立派なプロの医療人になってくれることを信じています。

さて、医師過剰の時代と言われ始めてから久しい気がします。勿論医師の数が急速に増えていることは事実です。しかし、患者にとっての「真の優秀な医者」が増加しているかどうかははなはだ疑問です。確かに、医療は年々進歩し、国際化、高度化は進んでいます。先進医療を行わないと世の中から相手にされない時代になっていることは疑いありません。しかし悲しいことに医学の進歩とは反比例して、患者の気持ちになって患者のための真の医療を行う機会や真の医療を行っている医師のパーセンテージは明らかに減ってきている気がします。皆さんの在学中に、私を含めた多くの教官が多くの科学的、学問的な知識を皆さんに与えることが出来たことは間違いないと思います。しかし我々の力不足のせいもあって、患者の気持ちになって患者のための真の医療を行うことを教えることが出来たかどうかははなはだ疑問です。ある意味でそれらは、上から教える（あるいは教える事が出来ること）ではないかもしれません。もしそうだとしたら、解決法は今後の皆さんの心（患者に対する感受性）次第と言って良いでしょう。これから一生の間、知識のみからは得ることの出来ない「何か」を求めて、心の研鑽をしてほしいと熱望します。

これから社会に巣立っていく皆さんに必要とされるのは、まず、医学のあらゆる分野における（基礎であれ、臨床であれ）十分な知識を得ること、そしてその知識におぼれることなく、十分な経験を積むことです。知識をおざなりにした経験、経験をおざなりにした知識は医学・医療の分野では全く意味がないことを肝に銘じてほしいと思います。これからの時代は、基礎研究と臨床研究が平行線をたどって独自に進歩するのではなく、複雑に絡み合いながら進歩する時代です。皆さんも、「私は基礎」「私は臨床」などと頭の中で一線を引くことなく、皆さんの頭の中で双方を複雑に絡み合わせることによってより良い医療人になって下さい。

最後にケネディー大統領の演説から抜粋した私の好きな文章を皆さんに贈ります。演説の中の「平和」を医療あるいは医学に置き換えて読んでみて下さい。

「我々の求める平和とは？それは真の平和、生きることに価値を与える平和、一時でなく永遠に続く平和です。人間がもたらした問題は人間が解決できるはず。我々は究極に同じ輪でつながっているのです。誰もがこの地球に住み、同じ空気を吸い、こどもの未来を思いやり、命を終えるのです」

(John F.Kennedy)

常に本学出身であることを誇りに思い、皆さんが仮に他大学、他施設に行ったとしても周囲の人々と大きな信頼関係を築ける医療人になって下さい。そして6年間を共に過ごした旭川医大のこと、友のこと、先輩のこと、後輩のこと、そして教官のことをどうぞ忘れないで下さい。中でも同期生は特に大事にして下さい。卒後何十年経っても同期生とは良いものです。皆さんの将来に明るい虹がかかっていることを信じています。

(整形外科学講座 教授)



第3期生に贈ることば

看護学科第4学年担当 北村 久美子

第3期生の皆さん、卒業おめでとうございます。
美しい自然に囲まれたこの大学で学び、多くの人
と出会い、視野を広め、豊かな人間性を育まれた
ことと思います。

学年担当として、私は皆さんの在学中あるでき
ごとをきっかけに、看護の仕事にとって大切なこ
とは、相手の身分、職業を問わず常に公平な態度
で思いやりと慈しみを持って関わることです、決
して高慢にならず謙虚であってほしい、人間的に
大きく成長してほしいと皆さんの良識に訴えたこ
とがあります。その後、皆さんの仲間に対する温
かい思いやりに触れ、すばらしい看護職に成長す
ることを確信しました。一方で、学年担当の職責
の重さを身をもって体験し、私自身がその職務を
十分に果たしきれたのかどうか、未だに不安を拭
いきれないでおります。

今日、看護界では「人々が抱いている看護への
思いを受け止めること」「地域の人に見える看護」
が求められており、保健・医療・福祉サービス提
供のあり方は、専門職主体の時代から「患者主導型」
に変わりつつあります。そもそも看護とは「その
人がその人なりに生きてゆこうとすること」を援
助することでもあります。NHK解説委員の村田幸
子氏は、ある講演の中でアナウンサーも看護職も
対人関係の仕事で、言葉の持つ大きさを意識して
関わる必要があることを強調しています。
そして、自分とは違う「相手の世界」をどれだけ
見とおすことができるかが課題であり、支援する
人とされる人が、してあげる、してもらうの上下
関係になっていないかを常に意識してほしいと訴
えています。相手（患者）と対等な関係を結べる
かどうかは、皆さんにとっても重要な課題である

と思われま。

看護職は世間から信頼されている職業であり、
いつの時代も若い人にとって「将来就きたい職業」
の上位を占め、アメリカの調査結果でも信頼でき
る職業のトップに挙げられています。現在、道内
では看護職が過剰になる傾向にあり極めて厳しい
現状を実感しております。皆さんは実力を持って
就職の場を見出しましたが、仕事を取り巻く環境
は益々厳しい状況になるものと予想されます。基
礎づくりのこの大学を誇りとして、納得のいく仕
事をし、後輩のためにも新たな道を切り開いてく
ださることを期待しております。人間の優しさと
生命を慈しむ重い使命を果たすことが、看護職の
務めであると思います。常に、看護の本質を見失
うことなく、時には原点に戻り、豊かな感性と確
かな知識と技術をもち看護専門職として立派に成
長されますように、心から祈念してやみません。

終わりに、私の好きな高村光太郎の詩を皆さん
への餞として捧げたいと思います。

道程

僕の前に道はない
僕の後ろに道はできる
ああ、自然よ
父よ
僕を一人立ちにさせた廣大な父よ
僕から目を離さないで守ることをせよ
常に父の気魄を僕に充たせよ
この遠い道程のため
この遠い道程のため

(地域保健看護学 教授)

卒業を迎えるにあたって

医学科第24期卒業生 児玉知之



入学するまでは他の学部よりも2年長い医学部はさぞ長く、かつゆったりとすごせるに違いないと思っていた学生生活も、もう残すところ国家試験と卒業式を残すのみとなり、本当に月日が経つのは

早いもので、とても感慨深く思われます。

この場をお借りしてこの6年間を振り返ってみたいと思います。

1、2年生の頃は、なんとなく過ごしてしまった感がありました。大学生活や部活に慣れたりするのに忙しかったというのもあったのですが、特に学業面であまり目的意識がなく、あの頃はテスト前の帳尻あわせが多かった気がします。もう少し言うとあまり医学部に入ったという自覚がなかったのかもしれない。しかし3年生になって、解剖学実習を始めとした、いかにも医学部的なカリキュラムをこな

していくとだんだん楽しくなり、医学部に入って良かったなと思いはじめました。この頃には部活も楽しくなってきたのを覚えています。私は合唱部に在籍していました。合唱部の主な活動は年2回、附属病院のロビーにて患者さんに聞いていただくためのコンサートを開くというものなのですが、私たちのお世辞にもうまいとは言えない合唱にもきちんと耳を傾けてくださり、場合によっては感謝の言葉をかけてくれたり、涙を流して喜んでくださる患者さんの様子を見て、なんとなくやっている、から、より能動的に取り組めるようになり、4年生の時には囃らずも部長を務めました。

その当時は大変でしたが、今にして思えば6年間で一番の思い出になっています。

その他にも、4年生から始まった臨床講義とそれに付随する辛かった進級試験や、今後医師を続けていく上で大変良い経験となった臨床実習などいろいろなことが思い出されますが、それら一つ一つを思い出すにつけ、6年間、同級生や諸先生方、家族等、様々な方々に支えられてこの卒業に至っている事が改めて感じられ感謝の念に堪えません。6年間本当にありがとうございました。

卒業にあたって

医学科第24期卒業生 上田泰久



卒業試験も終わり、無事に新年を迎え、残すは国家試験のみとなりました。長いようであつという間に過ぎてしまった学生生活を思い出すとともに、あとひと月に迫った国試への不安と共に暮らす毎日です。

思えば、入学式の数日前に旭川の下宿に着いた瞬間からスキー部の勧誘を受け、それ以来部活中心に夢中になって6年間を駆け抜けた気がします（挫折しそうになったこともあったのですが）。毎日練習に明け暮れ、東医体に行く資金を稼ぐためにバイトをし続けた日々でした。自由に遊ぶ時間や存分に勉強する時間は減ってしまいましたが、それ以上に自分自身の精神的未熟さや弱さ、逆に可能性など教室では学べないことをたくさん教えてもらったような気がします。

なぜ僕は大学で、しかも医学部でこんなにも部活動ががんばったのだろうか。周りの人からは時々大学まで来てそんなに運動することはないとか、大学は運動するところではない、などと言われたこともありました。たしかにそうだ、と思う反面、これが人生で最後のスポーツにはまれるチャンスだという考えのほうが強かったように思います。さらには、ポリクリ中に会うOBの方々の姿や話からそんな大学生活は間違いじゃないと確信できました。それに、やっぱり医者には体力が必要だし。ともかく、6年間の活動を通して、学外のいろいろな人と知り合い、影響を受け、入学当初の自分を思い出すと成長することができたのではないかと考えてきます。

最後に、今の自分があるのはそんな生活の中で出会った友人、先輩、後輩、先生方をはじめ皆さんのおかげです。そしてなによりも、こんなにわがまま放題に大学生活を送らせてくれた両親に感謝したいと思います。

ありがとうございました。

卒業にあたって

医学科第24期卒業生 山 岸 恵理子



私が初めて北海道に来たのは、旭川医科大学の受験の時でしたが、“初めての北海道、初めての旭川”として、いつも思い出されるのは合格発表の時のことです。合格通知を受け、翌日すぐ母と共に、私

にとつての“初めての旭川”に来ました。千葉で生まれ育った私にとって、3月なのに雪が降り積もっていることは大変な驚きでした。そんな光景に感動すると同時に、合格への喜びやこれからの旭川での大学生活に胸をはずませていたことを、今、懐かしく思い出しています。そして、6年間があつという間だったとも感じています。

大学生活では、医学の勉強はもちろん、さまざまな面で多くのものを得ることができました。

北海道の冬は厳しく、熱を出すこともありました。電話をくれる人、差し入れをしてくれる人、ノ

ートを貸してくれる人…。そこにはいつも友達の手助けと励みがありました。

冬になると恒例の鍋。夕方に始まり、朝まで語り明かしたこともありました。

道内を旅行したり、部活に励んだりしたこともよい思い出です。私の大学生活はバスケットなしには語れません。練習を重ねることでバスケットの本当の楽しさを知ることができたのは、何物にも代え難い経験です。また、互いを思いやり尊重しあうチームワークを通して築き上げられた人とのつながりは、かけがえのないものとなっています。

こうして振り返ってみると、本当に充実した6年間だったと感じます。

また、1度入学した大学をやめて受験し直すことを許してくれ、ここまで見守ってくれた両親に、心から感謝しています。陰で支えてくれ、学年が進むごとに喜んでくれた祖父、亡き祖母にも、心から感謝しています。そして、ここには書ききれない多くの方々の支えに、この場を借りてお礼を言いたいと思います。本当にありがとうございました。

卒業にあたって

看護学科第3期卒業生 富 樫 弥奈子



看護婦という夢を胸に旭川にきてから、早いもので四年が経った。この四年間は一年一年が思い出深い年月であったが、卒業を迎えるという実感は未だに湧いてこない。

山ほどある思い出が、良い思い出ばかりとは言えないが、私にとってどれも意味のあることばかりであった。

高校時代までなんとなく過ぎていった学生時代とは違い、大学時代はとても貴重な時間であったと強く感じる。実習をはじめ、学生という立場だからこそ教わることができたこと、悩むことができたことなど、失敗や悩みをじっくり考える時間を得られ、たくさんのことを教わり、経験することができたと思う。これからはこれらの貴重な経験を元に、責任ある行動をし、更に成長していきたいと思う。

大学生活において友人の存在は大きかった。この四年間を無事終えることができるのは、いい友人たちがいたからだと思う。失敗したことや辛くくじけそうな時、うまくいかないことがある時、そして嬉しい時、どんな時でも思わず話してしまうのが友人であった。実習の時は辛いこと、悩みなどを話し合い、同じ夢を目指す仲間として語り合った。どんな時でも私に対してしっかり意見を言ってくれる友人たちの存在があったからこそ、私はここまで頑張ってくることができたと思っている。今に限ったことではないが、いつも自分が友人を含め色々な人たちに支えられていることを忘れてはいけないと思っている。そして、何かしら支えてくれている人々に感謝したい。これからは離れてしまうことになるが、離れていても友人たちは私にとって心の支えとなる大切な存在になると思う。この四年間で得た多くの宝物をこれからもずっと大切にしていきたい。

最後に、四年間色々な形でお世話になった諸先生方、病棟のスタッフの方々、そしてお世話になった患者さんにこの場を借りて感謝の気持ちを述べたいと思います。本当にありがとうございました。

卒業にあたって

看護学科第3期卒業生 佐 藤 仁 美



看護婦になるにはこの先何が待ち受けているのかわからないまま旭川医科大学に入学して早4年、卒業の年となってしまった。この大学での毎日は勉強勉強というよりも、人と関わることの難しさや、

人を思いやることの重要さなど人間として基本的なことを学んだように思う。学年が進むにつれ専門科目が多くなり、テストやレポートに追われ、授業中居眠りしたことも今となっては懐かしい。実習では援助の根拠を考えることの大切さや、他者の前で自分の考え・思いを言葉に出して表現することの難しさを感じていた。自分が悔しくて泣いたこともあったし、自分が嫌で投げ出したい時もあった。しかしそんな時にいつも励ましてくれたのは友達や先輩だった。相手の身になって考える、今までは何のためらいもなく使っていた言葉だが

本当にそれを実践するのは難しいことだと思う。周りの仲間は何気なく側にいていつも支えてくれていた。それが人を支えることの原点なのだと思う。仲間がいたから私は実習を乗り越えて来れたし、自分一人ですることの限界を知れて自分のためにもなったと思う。

もう1つ私にとって大切な居場所であった部活。楽しい時間や辛い時間をともにし、お腹を抱えて笑ったり、真剣な相談をしたり、私がこの部活で得たものは大学生活の中で大きな割合を占めているように感じる。バトミントン部の一員で本当によかったと思う。

卒業後はともに学んだ仲間達それぞれが各地で働くことになるだろうが、この大学で学んだ時間は決して無駄にはならないと思う。辛いことに直面した時には仲間がいる。仲間に頼ってもいいと思う。自分が目指す看護に近づけるようにこれからも努力して行きたい。

最後に旭川医科大学で出会った諸先生方、病棟スタッフの方々、共に学んだ仲間達、影で支えてくれた両親へ感謝の気持ちを述べたいと思います。本当にありがとうございました。

平成13年度 博士学位記授与者名簿

氏名	課程・論文の別	学位記授与年月日
森 本 寛	論文博士	平成13年6月29日
西 部 茂美	論文博士	平成13年6月29日
佐々木 雅彦	論文博士	平成13年6月29日
進 藤 基博	課程博士	平成13年9月28日
山 本 泰司	論文博士	平成13年9月28日
會 澤 佳昭	論文博士	平成13年9月28日
水 上 裕輔	論文博士	平成13年9月28日
水 峯 昌之	論文博士	平成13年9月28日
藤 谷 幹浩	論文博士	平成13年12月25日
檜 木 徹	論文博士	平成14年3月25日
宮 本 義博	論文博士	平成14年3月25日
越 湖 進	論文博士	平成14年3月25日
竹 内 茂	課程博士	平成14年3月25日
藤 谷 佳織	課程博士	平成14年3月25日
佐 藤 智信	課程博士	平成14年3月25日
高 橋 一朗	課程博士	平成14年3月25日
水 上 創	課程博士	平成14年3月25日
岩 田 達也	課程博士	平成14年3月25日
石 崎 智章	課程博士	平成14年3月25日
佐 藤 栄一	課程博士	平成14年3月25日
滝 沢 修一	課程博士	平成14年3月25日

平成13年度 修士学位記授与者名簿

氏名	学位記授与年月日
中 澤 貴代	平成14年3月25日
平 岡 康子	平成14年3月25日





退官にあたって

生化学第一講座 藤澤 仁

昭和48年9月旭川医科大学開学と同時に生化学講座の担当を命じられて28年間半、毎日が日々新たな感動に満ちた楽しい研究生活を送らせていただきました。生化学は医師国家試験の科目になかったので学生諸君への講義も自由に楽しく話すことが出来たのも幸せでした。しかし定年退官が近づいてきた頃からカリキュラム改変、大學独立法人化などの話が次々と出てきて騒々しくなってきました。社会に目を転じますと、国外では米国やパレスチナなどでのテロとその復讐、国内では不況、失業、倒産などの言葉がテレビや新聞で日常的になり、構造改革を掲げた小泉内閣が国民の圧倒的支持を得て登場してきました。これまでの国債などの政府の借入金には既に日本の国家予算の十年分程の額となり、私達は目先の利益を追っかけてその代償をあとの世代の人達に背負わせようとしてきました。Natureの1月17日号に、お腹を空かせた鳩の実験が紹介されていますが、鳩は少し経ってから得られる沢山の餌よりも今すぐに得られる餌を量が少なくても選ぶそうです。しかし餌を得られるのが今すぐでなく少し後のこととなりますと、多少得られるのが遅くなっても餌の多い方を選ぶのだそうです。私達は普通の動物でなくむしろ神様に近いほど偉いのだと云う人もいますが、政治にしても教育にしても私達のやってきたことはお腹の空いた鳩とあまり変わりがないような気がします。そういえば、私達はサルもチンパンジーも全身が毛に覆われているのに私達には毛がなくて見かけ上はサルの類とは別の生き物のように見えますが、104個のアミノ酸から成る私達のチトクロームCがチンパンジーのチトクロ-

ムCと全く同じアミノ酸配列を持っているのに、サル(リーサスサル)とはアミノ酸が1個違って、チンパンジーはサルよりも私達に近いということ四十一年程も前から知っていました。また最近Scienceの1月4日号に私達の遺伝子がチンパンジーの遺伝子と1.2%しか変わらないというレポートが出ていました。つまりヒトとチンパンジーは遺伝的には99%同じ生物であるということなのです。

人は文化を持ったが故にサルでなく偉くなって神様に近くなったとうそぶく人もいますが、政府の政治改革や行政改革、大學の教育改革などの現状を見ていますと、少し先のことについても目の前にぶら下がった餌しか求めていないように見え、お腹を空かせた鳩の方が余程立派な生き物のように見えます。自慢の高尚な文化や文明をもう一度見直して、私達は概ねチンパンジーと同じような生き物なのだとして認識してせめてお腹を空かせた鳩に負けないくらいの生き方をしたいものだと思います。

私は本年3月末日で本学を定年退職し4月から滋賀県立成人病センター研究所に参ります。大学創設以来多数の方々たいへんお世話になりましたことに、深く感謝いたしております。厚く御礼申し上げます。これからの旭川医科大学は改革の嵐にさらされ、特に本来大學の使命とも云うべき科学研究は苦難の道を歩まねばならなくなるかも知れないことを考えますと心が痛みます。どうか皆様方の力で目先のことに惑わされず長期的な視野に立って立派な大學改革、教育改革を成し遂げて下さいますよう衷心よりお願いいたします。



就任のご挨拶

旭川医科大学生理学第一講座 高井 章

昨年10月1日より、黒島晨汎先生の後任として生理学第一講座を担当しております。すでに着任から半年近く経ちますが、この機会をお借りして新任の御挨拶を申し上げます。

まず略歴ですが、私は岐阜県の出身で、高校は県立岐阜高校、大学は名古屋大学医学部の卒業です。大学入学は1973年（昭和48年）、ちょうど旭川医大創設の年に当たります。本学で御厄介になることになったのも何かの御縁かと思えます。

私の主な研究テーマの一つは、毛様体筋収縮に関与するある種の非選択性陽イオンチャネル（NSCC）です。我々の眼球ではこの平滑筋の収縮弛緩により水晶体の厚みを加減して焦点合せをします。毛様体筋は、副交感神経伝達物質アセチルコリンによるムスカリン様受容体刺激に応じて、迅速に張力を発生し（初期相）、安定に保つ（保持相）ことが出来、それが速やかな焦点合せと保持とを可能にしています。従来の研究から、両相とも細胞内 Ca^{2+} を調節因子とすることは確かですが、その動員経路は異なり、初期相では細胞内遊離が、保持相では細胞外からの流入が重要です。しかし、後者の流入経路については従来全く不明でした。これに関し、我々は単離筋細胞における電気生理学的実験によりムスカリン様受容体刺激が2種のNSCCを開くことを示しました。毛様体筋は電位依存性 Ca^{2+} チャネルなどを欠くため、これら Ca^{2+} 透過性を持つNSCCが Ca^{2+} 流入経路となる可能性が十分あります。一方、元来ショウジョウバエ複眼の光受容機構の研究過程で同定された*trp*型NSCCの類似体が、近年、哺乳動物でも続々と発見され、そのあるものは薬物受容体経路の調節を受けることが知られています。我々は、毛様体筋でのその種の*trp*発現をRT-PCR法で確認しました。電気生理学的に観察されるNSCCと*trp*型NSCCとの関連に興味もたれます。

もう一つの研究対象は、プロテインフォスファターゼ（PP）阻害作用を持つ天然毒素です。これ

らの物質との付合いは、ドイツ留学中の1986年に、オカダ酸の平滑筋張力増強作用の研究を始めたときに遡ります。本毒素は、クロイソカイメン *Halichondria okadai* から抽出されたことに因み命名されましたが、実はある種のプランクトンにより作られ、それを捕食する海綿や貝類に蓄積するのです。北海道は食用貝類の養殖が盛んですが、季節により貝が毒化し、いわゆるキモの部分を食べると下痢性中毒を起こすことは御存知の通りです。オカダ酸とその誘導体は、そのような貝中毒の主要な原因物質です。各種平滑筋への張力増強作用については既に1982年に報告がありますが、機序は不明のままでした。一般に平滑筋では、細胞内 Ca^{2+} 濃度上昇により Ca^{2+} 依存性ミオシン軽鎖キナーゼ（MLCK）が活性化されミオシン軽鎖が磷酸化されて収縮が開始します。逆に、弛緩にはPPによるミオシン軽鎖の脱磷酸化が必要です。オカダ酸の張力増強作用は、当初MLCKの活性化を介するものと予想されていました。ところが、私の実験では、大方の予想に反し、MLCK活性化は見られず、PP活性の強い抑制が観察されました。さらに精製酵素を用いて調べると、オカダ酸は、真核生物の4種類の主要セリン/スレオニンPPのうち、1型と2A型をpM-nMの低濃度で特異的に阻害することが判明しました。今では下痢性中毒作用もPP阻害に起因するものとされています。その後、ミクロシスチン、カリクリンなど、オカダ酸とは構造が全く異なる物質で、PP阻害作用を示す毒素が相次いで発見されました。現在、これらのPP阻害剤の作用機構が解明されつつあります。大腸菌で大量発現したPPIとカリクリンとの共結晶のX線解析を行い、三次元的結合状態を決定したことは最近の大きな成果です。

以上が研究面を中心にした自己紹介です。未熟ながら教育・研究に精一杯努力しますので、御鞭撻のほど何卒よろしくお願い申し上げます。

1年を振り返って

医学科第1学年 林 韻 欣



大学に入ってからの生活は今までと大きく変わったように思います。

大学に入ると人間関係をはじめ、世界が広がりました。特に学部が学部なので、全国各地から様々な

年齢層の人を初めとして、様々な経験をしてきた人など、当然色々な人がいて、学ぶべきところも多くあります。また、私の場合、車を運転するようになって自分で行きたい所でいく事ができるようになり、行動範囲も広がりました。

しかし、一年も経とうとしている今、大学生活にはすっかり慣れてしまい、学校と家の往復生活では、学校と家という狭い枠の中でしか動いていないという窮屈さを感じ始めています。最近よく思うのは、例えばアルバイトやボランティアなど、社会に出て行う活動を今しなければ、一生のうち

で医者という仕事しか経験しない事になるかもしれないということです。何か新しい活動をする事で、人との出会いも増えるし、自分の視野も広がり、将来的にも自分のためになると思います。悪いことでない限りは、様々な事に挑戦してみる事が必要だと思いました。

しかし、現実には、毎日の講義や実習が忙しく、本当に行動し始めようという気が無ければ、日々やり過ごしている間にすぐ時間は過ぎてゆきます。勿論、うまくやりくりすれば様々な活動も出来ない事はありません。でも実行するには当然多大なエネルギーを必要とします。私は何かを始めたいという気持ちはあるのですが、気がつくと日々の生活に流されていて、いつの間にか1年が経とうとしているといったところです。また、実際に日々の生活を送っていると、勉強より他の活動に重点が置かれている時もあり、きちんと勉強しようなどという、初めの志を今一度思い起こす必要があると感じました。

もうすでに一年が終わろうとしています。これから世界を広げて、色々な事を吸収していきたいと思います。

1年を振り返って

医学科第1学年 南 尚 希



去年の4月、私は関西の親元を離れ一人ここ旭川にやってきた。入学式当日、私は念願の医学部に入学できたという喜びをかみ締めながら、不安はあるものの「6年間、一生懸命努力して良き医師になろう!」と深く決意した。

その日から早くも一年が経とうとしているが、最近入学当初ほど勉強に対する熱意はなくなってきたように感じた。後期からは医学の専門的な内容の授業が始まり、初めのうちはとても新鮮で、一年生から医学部に入ったという実感の湧く授業を受けられて幸せだと思っていた。しかし話に聞いてはいたが、医学の勉強は覚えることが膨大で、また医学をかじったばかりなので知識も断片的なため授業の内容を理解するのにとても苦しんだ。その結果試験前に理解もせずにとだやみくもに暗記をするという勉強のスタイルに嫌気がさしかか

っていたのだ。

ところがつい先日、前期に書いたチュートリアルレポートが偶然目に留まった。「血管系から生体機能を考える」という内容のものであったのだが、レポートには今の私と同様に理解に苦しんでいる様子が表れていた。しかし、よくよく見てみるとその内容は今私が試験に向け勉強している内容の一部と同じであり、今の私には容易に理解することができた。前期に理解できなかったことが理解できるようになったのだ。この一年間での自分の医学知識の成長が目に見えたようで嬉しかった。また知識不足の状態での勉強は理解できず苦しいけれども、我慢して知識を増やしていくことで必ず理解できるようになるのだと思った。この姿勢は、生涯、学習を続けなければならないと言われる医師という職業を目指す上で大切なことではないかと思う。

現在私は試験勉強に追われている。また学年が進むにつれ学ぶ内容も膨大になっていき苦勞は絶えないことと思われる。しかし入学式の日に自分自身に誓った「一生懸命努力して良き医師になろう!」という思いを大切に頑張っていきたい。

1年を振り返って

看護学科第1学年 清 永久子



入学してからもう1年がたとうとしていきます。振り返ってみると、たくさん色んなことがありすぎて、時の過ぎるのがあつという間だったように思います。

初めのころは、一人暮らしや勉強についていけるのか、といった不安でいっぱいでした。しかし、楽しい友人、頼れる先輩達に恵まれ、様々な不安は一気に解消されていきました。部活動やアルバイトをしていく中で、たくさんの人とふれ合い、その人達それぞれの考え方、生き方にふれるにつけ、色んなことを考えさせられ、自分の視野も広がり、良い勉強になっているように思います。机に向かってする勉強もとても大切ですが、将来人と接することが重要になる職業に就く私にとって、アルバイトや部活動といえど、普段と少し違う「社会」に出ることで自分の身の

助けになっているような気がします。学ぶことのできる場所は学校だけではないということを感じました。

また友達といっても楽しいばかりではなく、時に自分を見つめ直さなきゃいけない、と焦ることもあります。小中高校と違い、皆同じ目標を持ってこの大学に来ているので、とても刺激を受けることの多い毎日です。また、同じ目標を持っているからか、クラス全体の雰囲気もいいです。1週間に及ぶ初めての実習の時など、辛いこともたくさんあり、途中で投げ出したくなる事もありましたが、皆がいたから乗り越えられたように思います。友達にはとても感謝しています。友達はかけがえのないものです。これからもずっと仲良くしていきたいです。

こう考えてみると、あつという間の中でも様々なことを学んだ1年でした。これからも学ぶべきことは多くあるだろうし、辛いこともまだまだあると思います。でも、目標に向かう気持ちと友達がいれば乗り越えて、二年・三年・四年と頑張っていきたいです。

1年を振り返って

看護学科第1学年 横井 久美



これを書いている今日は、実はセンター試験初日です。昨年の今頃は私も必死になっていたのだなあと懐かしくなりました。そして何とかこの旭川医大に合格し、もうすぐ1年が経とうとしています。

この1年を振り返ってみると、月並みですが本当にあつという間の1年でした。4月の入学式では部活の勧誘に圧倒され、新歓合宿では大学のすごさというものに驚愕しました。そしてなんだかんだで前期試験。この試験には本当に泣きを見ました……。後期になると実習のオンパレードでとても大変だったのですが、今までしたことのないことばかりでとても興味深いものでした。その中でも病棟実習は最も特別です。初めてなので患者さんの治療・処置に直結することはありませんが、実際に病棟に行き、患者さんに接したことは、私

にとって大きな経験となりました。そしてこの経験は、これから看護の道を進んでいく上で大きな支えになると思います。

もうすぐ2年生になりますが、1年生とは違って講義もより専門的になってくるだろうし、部活では行事のセッティングを全てしなければなりません。だからこの忙しかった1年よりもさらに忙しくなると思います。でも同時に2年目であるため、1年目ではわからなかったシステムがわかり、1年目よりも充実した生活が送れると思います。その経験を生かして、勉強に、部活に、バイトに励みたいと思っています。

私の大学生活は残り3年間です。3年間と考えると長いような気もしますが、きっとあつという間に1年が過ぎたように過ぎ去ってしまうと思います。その短い3年間をどのようなものにするかは自分次第です。だから後になって後悔しないよう、むしろ充実していたと思いながら卒業できるよう、努力しながら生活していきたいと思っています。

新歓合宿のご案内

新入生歓迎実行委員会委員長 民谷 健太郎

私たち新入生歓迎実行委員会は、新入生が早く学校生活に慣れてもらえるよう、様々な活動を行っています。それらの活動の中で最大のイベントが「新歓合宿」です。

新歓合宿は入学式翌日の4月6日、7日に時屋亭という旅館で行われます。この合宿の目的は新入生同志の親睦を深めることにあります。内容は部活動の紹介や学校見学、時屋亭での歓迎会など盛りだくさんです。特に大学生活を左右する部活動を選ぶ上で新歓合宿が重要になってきます。なぜなら、様々な部の先輩と直に接することができるからです。

また、この合宿には毎年、新入生のほぼ全員が参加するので同級生の友達がたくさんできます。友達ができるのだろうかという心配もすぐに吹き飛んでいきます。

最後に、宿泊場所の時屋亭は心地良い大浴場があります。お風呂道具のご用意を。では新歓委員一同、新入生のみなさんの御参加を心よりお待ちしております。

学生団体の設立・継続届について

平成14年度において、団体活動を継続しようとする学生団体または新しい団体を設立する予定の学生は、4月26日（金）までに設立届または継続届を学生課に提出してください。

なお、継続届の提出がない学生団体は、解散したものととして取り扱いますので注意してください。

（学生課）

学生教育研究災害傷害保険の加入について

本学は、学生の正課中・課外活動中・通学中及び大学の授業等、学校行事又は課外活動で施設間移動中における災害事故補償のために『学生教育研究災害傷害保険』の賛助会員大学となり下記のとおり加入受付事務等を行っております。本保険は、学生の相互共済を基本として運営されており、学生生活中の万一の場合に備え、全員加入の方針をとっております。

加入を希望する学生は学生課専門職員（厚生担当）に申し込んでください。

記

1. 受付期間 自平成14年4月1日（月）
至平成14年4月26日（金）
2. 受付窓口 学生課専門職員（厚生担当）

平成14年度 日本育英会奨学生の募集について

日本育英会は、優秀な学生で経済的理由のため就学困難な者に学資を貸与しています。

本学では、日本育英会からの推薦依頼に基づき、出願者の種々の条件を考慮して選考を行い、日本育英会へ推薦します。

ただし、日本育英会では奨学金貸与の種別ごとに推薦基準が定められており、その資格があっても採用枠の関係で推薦できない場合があります。

奨学生募集要項を、4月上旬に公用掲示板に掲示しますので、貸与を希望する学生は、提出期限までに所定の書類を学生課専門職員（厚生担当）に提出してください。

なお、募集の時期以外に家計の急変により、学資の支弁に困難な事情が生じた場合は、専門職員（厚生担当）に相談してください。

平成14年度 前期分授業料免除 及び延納・分納について

平成14年度前期分授業料免除及び延納・分納を希望する学生で、免除基準のいずれかに該当すると思われる者は、学生課専門職員（厚生担当）から必要書類を受け取り、申請期間内に提出してください。

免除基準の概要はつぎのとおりです。

* 経済的理由で授業料納入が困難であり、かつ、学力優秀と認められる場合

* 授業料納期前6か月以内において学資負担者が死亡、又は本人もしくは学資負担者が風水害等の災害を受け、授業料納付が著しく困難であると認められる場合

なお、免除基準及び申請期間については、公用掲示板に詳しく掲示してありますのでご覧ください。

また、不明な点は、専門職員（厚生担当）に問い合わせ願います。

平成13年度

1 年 の あ ゆ み

- 30日 看護婦国家試験合格発表
(本学合格者59名、合格率100%)
保健婦国家試験合格発表
(本学合格者69名、合格率97.2%)
助産婦国家試験合格発表
(本学合格者7名、合格率87.5%)

4月

- 6日 平成13年度入学式
医学科新入生 95名
看護学科新入生 60名
看護学科第3年次編入学生 10名



入学式

- 9日 前期授業開始
15~16日 看護学科新入生合宿研修
(於 大雪山白金観光ホテル)



看護学科新入生研修(班別討議)

- 22~23日 医学科新入生合宿研修
(於 大雪山白金観光ホテル)



医学科新入生研修(救急法)

- 26日 医師国家試験発表
(本学合格者112名、合格率92.6%)

6月

- 15~17日 第27回医大祭
医科フェスタ2001
29日 博士学位記授与式
博士学位記被授与者 3名

7月

- 6~9日 第48会北海道地区大学体育大会
当番大学:北海道教育大学
本学参加種目:陸上競技(男女)、準硬式野球、ソフトテニス(男女)、バスケットボール(男女)、バレーボール(男女)、サッカー、卓球(男)、バドミントン(男女)、剣道(男女)、ハンドボール、弓道(男女)
成績:準優勝、ソフトテニス(女)、バドミントン(女)
第3位、陸上競技(女)、準硬式野球、卓球(男)、剣道(女)
総合成績:男子7位、女子3位
13日 合唱部サマーコンサート(附属病院)



合唱部サマーコンサート

- 7月25日 第44回東日本医科学生総合体育大会(夏季部門)
~8月13日 主管代表大学:防衛医科大学校
本学参加種目:陸上競技(男女)、準硬式野球、テニス(男女)、ソフトテニス(男女)、卓球(男女)、バレーボール(男女)、バドミントン(男女)、サッカー、バスケットボール(男女)、柔道、剣道、空手(男)、水泳(男女)、ハンドボール、ゴルフ(男女)、ラグビー
成績:優勝、バドミントン(女)
準優勝、ゴルフ(女)
第3位、剣道(女)

26日 平成13年度医学科第2年次後期編入学者
選抜試験

8月

1日 平成13年度医学科第2年次後期編入学者
選抜試験合格者発表

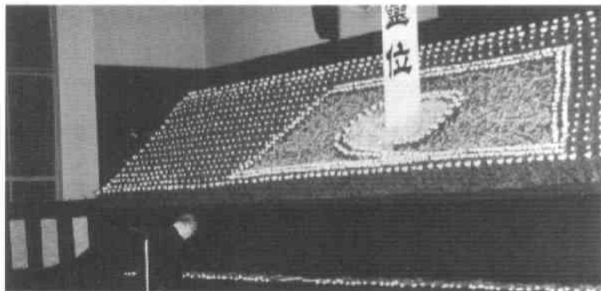
17日 外国人留学生夏季オリエンテーション
(美深町 ふれあい牧場他)
参加者 留学生5名、留学生家族6名



留学生夏季オリエンテーション

9月

5日 体育大会 (学生主催)
総合1位 医学科2年、医学科3年 (同率)
26日 平成13年度解剖体慰霊式



解剖体慰霊式

28日 博士学位記授与式
博士学位記被授与者 5名
28日 平成14年度看護学科第3年次編入学者選
抜試験

10月

1日 平成13年度医学科第2年次後期編入学生
入学式
1日 平成13年度公開講座
~22日 「環境と健康」
10日 平成14年度看護学科第3年次編入学者選
抜試験合格者発表
13~14日 平成14年度AO入試
24日 平成14年度AO入試合格者発表
27日 平成14年度大学院修士課程看護学専攻入
学者選抜試験
29日 平成13年度公開講座
~11月15日 老年医学の最前線パートII -
「からだ」と「ねむり」の医学



公開講座

11月

5日 本学記念日
7日 平成14年度大学院修士課程看護学専攻入
学者選抜試験合格者発表
25日 平成14年度推薦入学者選抜試験

12月

25日 博士学位記授与式
博士学位記被授与者 1名

1月

5日 平成14年度看護学科推薦入学者選抜試験合
格者発表
19~20日 平成14年度大学入学者選抜大学入試
センター試験
21日 平成14年度大学院修士課程外国人留学生入
学者選抜試験

2月

2~3日 外国人留学生冬季オリエンテーション
(大雪青年の家)
参加者 留学生8名、留学生家族7名
6日 藤澤 仁教授 最終講義
15日 平成14年度大学院博士課程入学者選抜試験
25日 平成14年度第2次試験 (前期日程)
27日 平成14年度大学院博士課程入学者選抜試験
合格者発表

3月

4日 外国人留学生との懇談会及び交流会
6日 平成14年度第2次試験 (前期日程)
合格者発表
12日 平成14年度第2次試験 (後期日程)
22日 平成14年度第2次試験 (後期日程)
合格者発表
25日 平成13年度学士学位記授与式
学士学位記被授与者164名
(医学科97名、看護学科67名)
25日 博士・修士学位記授与式
博士学位記被授与者12名
修士学位記被授与者2名

入院患者さんとクリスマスコンサート



日頃の練習成果を発表するとともに、入院生活をおくっている患者さんにクリスマスの雰囲気味わってもらおうと、この時期に毎年企画されています。



今年は、午後3時から午後5時の時間帯で3日間にわたり、12月21日に合唱部、22日にプラスアンサンブル、23日にはギター部と3つの部のリレーとなり、サンタクロースの登場やプレゼントが配られるなどバラエティーに富み、病院の中でのクリスマスとなられる患者さん達も大変喜んでおられました。（学生課）



留学生冬季交流事業実施される

平成13年度外国人留学生冬季交流事業が、2月2日(土)・3日(日)の2日間にわたり、美瑛町白金の「国立大雪青年の家」において実施されました。

この事業は、北海道の冬のスポーツ、スキーを通して雪や寒さの中での楽しみを知ってもらうと共に、留学生同士の交流や「青年の家」を利用する研修生の人達とのふれあいを目的に、今年で2回目の実施となりました。在籍留学生11人中8人と、その家族7人、指導教官1人及び学生課職員2人の計18人が参加しました。

初めての人に、ベテランの人が手をさしのべるなど、助け合いと共にスキーの楽しさを覚えました。

また、夜の交流会ではスキーと助け合いから和や

かな雰囲気が続き、有意義な留学生生活をおくれるよう情報交換、意見交換が活発に行われました。

(学生課)



「米国医学教育に関する特別講義」の開催

平成14年2月4日(月)の午後1時20分から臨床第3講義室において、アメリカ、ペンシルベニア州立大学医学部ハーシー校4年日(自由選択研修)学生 Ami A. Hatta 氏を講師として、「米国医学生からみた米国における医学教育」と題して、学生、同窓会会員、教職員を対象に特別講義が行われました。

(主催：旭川医科大学、旭川医科大学医学部医学科同窓会)

にこやかな笑顔でスライドを示しながら、分かりやすい英語でお話してくださいました。

熱心にメモをとる学生も見られ、講義後には学生から多数の質問が寄せられました。

(学生課)



研究室紹介

臨床検査医学講座 助手 河端 薫 雄

臨床検査医学講座は創立以来14年目を迎えました。牧野幹男教授、池田久實教授を引き継がれ3代目となる伊藤喜久教授が自治医科大学から赴任され、「研究、教育、検査診療をバランスよく、全てにベストを」のモットーのもとで、新たなスタートが切られて丁度2年目になります。

伊藤教授が同定したプロテイン1を講座の研究テーマに据えて、教室全体でこの蛋白の構造・機能、病態解析を中心に取り組んでいます。プロテイン1(C C10と同一)は肺細胞、前立腺上皮、子宮内膜等で産出される外分泌性の低分子タンパクで、自然免疫(innate immunology)に関与すると考えられており、林講師は血小板のシグナル伝達に対する影響効果をテーマに、河端は構造遺伝子のSNPs(single nucleotide polymorphism)を検索し、転写・分泌等に対するSNPsの影響効果の解明を進めています。他大学との共同研究もさらに拡がり、I g A腎症、サルコイドーシスにおける臨床的意義が明らかに

なってきました。コアカリキュラムの登場、卒業研修のシステムが整備されるなど新たな教育研修システムが誕生し、検査医学の教育もさらに充実が求められており、新しい教育手法や実践の医療に直結する検査法を積極的に取り入れ、時代の要請にも対応できるよう務めています。幸村助手は検査教育の要として、きめ細かにオスキー、チュートリアル、臨床実習をおこない、好評を得ています。また、検査部との協力で国際、国内標準化活動の一環として、国際標準品の作製、外部精度管理調査活動の充実など幅広く検査診療を展開して、地域医療に結びつく検査の独自性が生まれてきました。

教室、検査部の一人一人が心と力を労しながら、patient-orientedの臨床検査の未来を開く毎日が続いています。



訃 報



本学附属動物実験施設講師田中宏氏（59歳）には、平成13年12月29日（土）午前4時30分、急性心不全によりご逝去されました。

同氏は昭和50年10月1日に動物実験施設の助手として任用され、当時国立大学としては不利な最北端の地にあつて近代的な動物実験施設の創設に従事されました。その後も歴代の施設長を支え、実験動物飼育管理環境の整備、技術者や学生の教育、実験実施者への情報提供に傾注され、動物実験を介した医学研究の場の構築に多大な尽力をされて来られました。

ここに謹んで哀悼の意を表します。

教官の異動

転出	H13.12.1	整形外科	講師	武田 直樹
昇任	"	法医学	助教授	清水 恵子
"	"	耳鼻咽喉科	講師	林 達哉
採用	"	第二内科	助手	斉藤 裕樹
"	"	整形外科	助手	寺西 正
辞職	H13.12.31	皮膚科	助手	伊藤 康裕
"	"	脳神経外科	助手	吉田 克成
復職	H14.1.1	皮膚科	助手	木ノ内基史
採用	"	放射線科	助手	中島 香織
辞職	H14.1.31	微生物学	助手	錫谷 達夫
"	H14.2.28	皮膚科	助手	中根 宏
昇任	H14.3.1	耳鼻咽喉科	講師	今田 正信



怒 外

解剖学第一教授

吉田成孝

学ぶということ

着任してほぼ1年がたち、いろいろと勉強させて頂いた。特に、教え、学ぶということについて考えさせられた1年であったように思う。主に担当している系統解剖学で特に感じたのは、私が学生時代の頃との相違である。そのころは教授や助教授の先生はとてつもなく偉いと思っていたので気軽に質問をするなどとはとても考えられなかった。助手の先生でさえ、目が合うと「これは何だ」などと訊かれしどころもどろろにしか答えられないといった目に遭うのが常であった。そこでなるべく目が合わぬようにとにかく下を向いて手を動かしていたものだ。今考えれば、その時の先生方もいろいろ訊かれたりするのが嫌で先制攻撃を仕掛けていたのではないかなとも思う。しかし、今の学生

は違う。それこそ辞書代わりに何でも訊いてくる。実習室に置いてある教科書を一寸見ればすぐにわかることでも“立っているものは・・・でも使え”とばかりに訊いてくる。常々、「積極的にどんなつまらなそうなことでも質問するように」といつている手前、何でも答えるようにつとめる。そうして、学生は観察している神経や血管などを“同定”して一応納得する。そんな中で考えたことが“理解する”とは何であるかということである。解剖学とはともかく暗記するものとされてきており、学生を苦しめ続けてきた。骨の名前や筋の名前等々をひたすら機械的に覚え、試験が終わるとすぐに忘れるといった所が普通であろう。しかし、本当は自分の中に人体の構造、更にはその機能のイメージを作ることが解剖学の本分であると思う。他の学問でもそうであろうが、理解すると言うことは何らかのイメージが自分の頭にできて、医学の場合はそれをもとに臨床に、また、時によっては試験にそのイメージを生かしていくということなのではないかと思う。そのためにはどう教えていけばいいのか、それを今思案中である。